

パリ日記（一）

『ももんが』一九九〇年五月号

一九五〇

八月二十四日 木曜

午後二時三十五分アムステルダム飛行場発。四時十分パリ着。税関は実に簡単だ。両替所で五十ドル替える。一万七千何フランか貰って急に金持になったような気がする。両替するのをバスの案内人が待っていてくれる。エール・フランスのバスに乗ると直ぐに出る。これがパリの郊外か。しばらくそういふ所を通るとやがて賑かな町へ出る。凱旋門が見える。エッフェル塔も見える。エトワールの廣場をぐるつと廻って、間もなくセーヌ河を渡りエア・ステーションへ着いた。

早速案内所へ行って宿を世話して貰う。コンフェレンスで来たのだが、日本の学者は金持でないだから高くない宿を世話してくれと頼む。「パ・シエル、メー・パ・マー」という取っておきのフランス語を使ったりした。それからソルボンヌに用があるからクワルティエ・ラタンにして貰ひたい、それに大きいホテルは嫌いだから小さいのを頼むと勝手に並べる。若い男の案内人が笑いながら電話帳だかホテルの名簿だか繰って電話をかけてくれた。そうして「ブルヴァール・ドゥ・ポール・ロワイヤール、四八、オテル・スニイ」と紙に書いてくれた。タクシーはあそこへ頼めばよいと教えてくれる。

タクシー受付へ行って書付を見せて頼むと「トロワ・サン・フラン」という。フランスの金の勘定にはさぞ難儀することだろうと内心びくびくしていたが、これは一聲で分ったので少し得意になる。今空港で両替して来たばかりのフランスのインフレ札を沢山持つてゐるから三百フラン耳をそろえて出す。フランを円と思へばよいのだから勝手がよい。何分かかるか知れないが、三百フランなら東京と同じ見当だ。フランスの物価がよく分らないので、アムステルダムで合ったS教授に少しきいてみようかと思つたが、そんな暇がなかった。それで用心のため宿もなるべく安いのを取ることにしたのである。

オテル・スニイときいて何となく「ジエニイの家」を連想した。フランソワーズ・ロゼーのような妖しくも美しい小母さんでも出て来たなら逃げ出すほかはあるまいなどと下らぬ空想をしながら車に収まっていた。やがてポール・ロワイヤール街を走っていた。町名を書いた札が車から読めるのだ。ポール・ロワイヤールの僧院を想ひ、何となくパスカルを想つ。

間もなく着いた。なるほど小さなホテルだ。閑静らしい。出て来たマダムはロゼーのような人ではなく、てきぱきした威勢のいい小柄の人だった。部屋をというところ「サンク・サン・サンカント・アベック・バン、キャトル・サン・サンカント・サンバン」という。実はこれは一言では分らなかつたのだ。思はず首をかしげるとすぐ紙へ書いてくれた。むろん風呂つきがいいという。五五〇フランなら安いものだ。二人しか乗れない小さなアサンスールで六階まで昇る。このうちの最高階だ。エレベーターのすぐ前の三〇という部屋へ案内する。入って見ると大きな部屋だと思つて驚いたら、入口から丁度対角線のところに大きな鏡があつて部屋の像を作つていることは、もう一人の自分が此方を見ているので分つた。窓際へ行つてみるとパリの南の方が一眸のもとに見える。「セ・ピヤン？」ときく。「トレ・ピヤン」と言わざるを得ない。通りは大体東西でホテルは北側、この部屋は南向きだ。わるくない。よく見ると書き物机も椅子もアルルのファン・ホツホの部屋にあつたくらいの粗末なものだし、敷物はだいぶすれているけれども、自分のうちのことを思えばぜいたくは言えない。その上金筋のついたボーイなどいなくて、僅かの女中くらいで小ぢんまりやっているらしいのが気に入つた。これに定める。

そしたら今夜の分を払えという。数日滞在するのだがと言つたら「ス・ソワール」という。そこで一千フランの札を出す。年増の女中らしい黒っぽい洋服を着た人がお釣を持って来て、エトランゼーだと思つて百フラン札を一枚二枚と竝べべるから「分つた、僕は数学者なんだ。」と言つたら笑つた。マダムも笑つた。パリへ来ただけで心がこれだけほぐれたのだ。エール・フランスで勝手な注文をしたのも既にそれだった。

その前に宿帳を書いた。職業のところへプロフェッスールと書いたら「プロフェッスールか」と言つてマダムが心持ち目を丸くした。そうでなくても目のくるりとした可愛いマダムだ。ピンク模様の洋服を着た三十ちよつと位の人だ。ひどく見すばらしいプロフェッサーだと思つたのかも知れぬ。

朝飯はここで食べるのかときいたら「飯はレストランへ行くんだぞ、セッサ」という調子に聞いた。とてもきびきびしたマダムだ。なるほどホテル・レストランでないことは入るとき気がついた筈だったのだ。何しろ風呂つきで五百五十フランとは有難い。早速垢を落してシャツでも替えて夕飯を食ひに出かけようと思ひ、湯の栓を捻つてみたが水しか出ない。六階の暫く使わなかつた栓だからお湯が出て来るのに暇がかかるのかと思つて出してみるが、いつまでも水だ。お客が少いのでこれからわかすのかなと思ひ、あとにした。少し休んでいるうちに七時になつたから夕飯を食ひに出る。

左へ少し行けばアヴェニュー・デ・ゴブランとブルヴァール・アラゴの辻へ出る。

アラゴー通りというのが気に入ったから、そっちへ少し行くとレストラン・アラゴーという小さなうちがある。これが気に入ったから入る。テーブルが六つ七つしかなくて娘さんが二人で働いている。甚だ気軽でよい。メニューを読むのに手間どっていると、メロンを食うかというから「ウイ。」「シャトーブリアンはどうか」というのでこれも「ウイ。」「エペー」、こんなに厚いんだと手真似をしてみせる。「ボワール？」には「ヴァン、ブラン」と答える。そうして棒を切ったようなパンを食う。それからコーヒーを呑んで三百フランばかりだから思ったより安い。

エール・フランスで買った地図を見ると、アラゴー通りの延長のブルヴァール・サン・マルセルを少し行くとセーヌ河へ出ることが分る。八時少し前でまだ明るい。そっちの方へ歩いて行く。高架線に突き当って左へ行くと河岸へ出た。橋の中程まで行くとふと右の方を見ると十二三日の月が三段ばかり昇っている。おおセーヌ河。左の方を見るとノートルダム尖塔が見える。しばらく其処に立ちつくした。やがて橋を渡り切ったが、今日はこのくらいにして帰ろうと思ひ引返す。暫く歩いているとさつきと様子がちがっている。考えてみたら往きに高架線へ突き当って少し左へ曲ったことを忘れて、帰りに真直ぐ歩いていたのだ。少し戻ってみるとさっきの通りがあった。

宿へ帰ってバスを試みる。依然として水しか出ない。これは安いホテルのせいかな、それともまだ八月だからパリではゾーシユかなと思つ。水でもまだ冷くはない。体を洗ってさっぱりした。アムステルダムからの垢を落した。

部屋の電灯が少々暗い。これも安いからかな、それともフランスがまだ楽でないせいかな。しかしベッドの上の電灯は明るくて気持ちがいい。何か読むのには持つて来いだ。これは実際的でよい。新聞を読み、またパリの地図を見る。

八月二十五日 金曜

昨夜はパリを見た興奮が知れないがなかなか寝つかれなかった。さすがにパリだ、夜中の三時頃口笛を吹いて歩いている男がある。三時頃月が沈むのが窓から見えた。窓のカーテンを半分だけしめて半分残しておいたのだ。

七時半に起きた。書き物機の椅子は木ばかりでクッションがついていないが、別に脇かけ椅子がある。八時少し過ぎ洗濯物を頼み今日の家賃を払って朝食を食いに出かける。毎日払うのは間違いがなくていい。アラゴーはまだ開いていないらしい。昨夜歩いたサン・マルセル街へ出て何処で朝食を食ったものか物色していたらオルレアン駅前まで来てしまった。そこにキオスクがあるので切手をきいたら、あそのビュロー・ドウ・ポストへ行けといふ。その前にレストランがあるから腰をかける。三日月パンをのせた皿を持って来たからコーヒーを頼む。「オー・レー」ときく。「ウイ。」それからパンを追加して行った。ここは往來を眺めたり、駅から出て来る人を見物していると面白い。金

を払おうとすると「三つ食ったか」ときく。「ウイ」と答える。食っただけ払うのだから気が楽でいい。残したのは持って行って新しいお客のところへ出し、それに新しいのを追加するのだからあっさりしていてこれもいい。

さつきキオスクのおばさんがあつちに郵便局があると言ったので、ギャルソンにきいてみる。直ぐに分った。うちへ航空便のはがきを出す。帳面をしらべて六十フランだという。これなら間違いなく届くだろう。アムステルダムでは郵便局がなかなかないので、キオスクで切手を売る婆さんにきいて貼ったので日本へ行く航空便には足りなかったらしい。

それからセーヌ河を渡って北岸へ出る。河岸を歩いていると船の塗り替えをやっているのが見える。婦人がペイントを塗っている。婦人も働いているのである。その船室にはきれいなテーブル・クロスのかかった食卓が見える。食事をするところは人間生活の中で最も大事な場所の一つだ。そこがきちんと、そうしてきれいになっているのは美しいものだ。

ボン・ルイ・フィリップのあたりから古本屋の箱が見えて来た。道端のコンクリートの土堤へコの字を横にした形の金具を上から挟み、これに箱が取りつけてある。箱は奥の方が丈が高く上が勾配になっている。これを蝶番で開くと中に本が並べてある仕組みだ。まだ朝が早いせいか開いてあるのはちらほらだ。多くは閉じて鍵がかかっている。してみるとこれはみんな置きっ放しにするのだろう。今將に店を開かうとしているところもある。開いているのを覗き込んで行ったら二三軒目の三十フランと区切りをした一画の中にアムペールの「日記及び書簡」という小型の本のあるのが直ぐ目についた。背革で文字のところは濃いブリュー、文字は金である。手にとってみるとアンドレ・マリー・アムペールだから間違いなく物理学者のアムペールだ。一八七三年のものである。こんなのが三十フランの一画の中にあるとは思っても寄らなかつた。名にし負うセーヌ河畔の古本屋だけのことはあると思つて感心した。早速買い取つた。まだほんの二三軒しか見えないのにたいした獲物だ。しかしこの調子でいい本が見つかったら困ると思ひ。みんな三十フランならいいが、それも行くまい。そうすると相当の金になるかも知れない。それも困るが、荷物が余りふえると飛行機の超過料金をとられることになる。悲喜交々到るという形だ。

今日はルーヴルへ行こうと思つて出かけて来たのだ。一ついい見つけものをしたのに満足して、本屋はまたこの次ということにしよう。そう思つて美しい橋やシテの島を眺めながらマロニエの並樹路を歩く。実によい気候だ。少しも暑くない。

やがてルーヴル宮殿のところへ出た。美しいコロナードを見て東のアーケードに入り、中庭を横切る。もう一度アーケードを潜ると左手に入口がある。三十フランで入場券を買った。広い絵はがき売場があるが、それは絵を見てからのことだ。目録もあとだ。よく目録の校正でもするように見ている人があるが、自分は手ぶらで見る流儀だ。もっともさつき買ったアムペールは大事に手に持っている。目録はあとから見ても、そうして実物を思いかえすのが好きだ。

先づローマの彫刻、それからギリシアのものを見る。サモトラスの勝利は実に印象的な置き方がしてある。アテネのアクロポリスに立っていたパルテノンのフリーズがある。上の方が欠けているけれども典雅なものである。ギリシアの学者の首がある。前と後へ別の人の首を彫刻したのがある。やがてミロのヴィナスがあつた。これは特別の場所に飾つてあつて、周りをゆつたりと取つてある。ぐるっと廻つて、また遠く近く自由に見られる。美しい顔をしている。更に古代のものが沢山ある。エジプトの象形文字のついたものがある。これを解読するのに苦労したシャムポリオンのことをちよつと思つた。スフィンクスの置いてある部屋がある。小さなピラミッドもある。これらは専ら歴史的興味に属し、芸術的感興を余りそそるものではない。しかしその歴史的興味自体を追求することにすれば、それはまた面白いことに違いない。それはやるとすれば別の日にした方がよさそうだ。一わたり見廻していよいよ絵の方へ行く。絵を少し見てからアポロンの間へ入る。ここには王冠だの寶石だの、そういうものが置いてある。豪華な細長い部屋で天井には絢爛たる装飾がしてある。ここは十二時から二時まで閉じると書いてあつたので、早く見ておくことにした。

その隣りの四角な部屋にヴェラスケスなどがある。その向こうに特に有名な長い畫廊が見えて来た。レオナルドはあそこだなと思ふ。そこへ行く前にその横丁の部屋を見る。オランダ派はアムステルダムでだいたい見て来たから、あゝかういふのかという気がする。それからいよいよ大ギヤラリーを見る。ラファエルやレオナルドを見る。複製で見ておたのの本物を目の前に見る。ラファエルの人物はいい顔をしている。レオナルドのモナ・リザはだいたい変色してあるといふことであるが、とにかくあのルネッサンスの天才の作品を飽かず眺めることができる。モナ・リザの真正面に書架を据えて模写しているお婆さんがいた。それには関はず自由にレオナルドを見に行つたら、婆さんがちらと俺の方を見た。お婆さん、もしレオナルドが見たら、その色はもう変つているんだよ、と注意してくれるかも知れませんかよ。

それから十八世紀頃のフランスの絵やその他沢山のものを見た。少し疲れたから外へ

出る。出たところに丁度腰かけの高さに石の段が建物についている。そこへ掛けて煙草を吸う。昨日煙草屋へ入ってほかの人が買っている水色の包みを買ったら実にまぶくて日本へ帰ったような気がした。オランダでもう少しいいのを吸って来たせいらう。しかしこの煙草もここで吸っていると中々いい。すぐ目の前に小凱旋門が見える。それを見てチュイルリー公園を歩く。幾何学的な均整の美を持っている庭園である。草花が模様になるように植えてある。少し遠くから見るとまるで白く見える草がある。近づいてみると薄い水色なのだが、葉が光をよく反射するためか非常に白い。何という草かしら。それが花模様の中で独侍の役を持っている。花壇の処を通り過ぎ、木立の中の茶店で暫く休む。

そこを出るとコンコルド広場である。エジプト文字の書いてあるオベリスクを見る。ナポレオンがエジプトから持って来たものだ。その向こうがシャンゼリゼーだ。写真で見ていた美しい街路樹の下を歩く。昨日エール・フランスのバスで素通りしたアヴェニュー・デ・シャンゼリゼーをエトワールの広場まで歩く。凱旋門を眺め、三十フラン出して上へ昇ってみる。階段がずいぶんあって途中で少々辟易する。五十フラン出してエレベーターへ乗ればよかったが、歩いて昇るのもわるくない。上にちよつと広い部屋があつて写真や版画などでこの歴史を見せている。そこを出ると見晴らしがいい。アヴェニュー・シャンゼリゼーを初めとして、ここから何本通りが出ているかと思つて数えてみたら大小合せて十二本あつた。西の方に木の茂っているのはブローニュの森である。

階段の途中に薄暗い所があつて、下りるのは昇るのよりも面白くなかつた。今度はシャンゼリゼーのさつきと反対側を歩き、グラン・パレーとプティ・パレーの間を歩いてアレクサンドル三世橋へ出た。美しい橋である。袂の四隅に塔が立っていて其の上に金ピカの彫像がある。橋か横側も美しい装飾が施してある。

そこからセーヌ河の北岸を歩く。やがて古本屋がつづく。少し覗いてみたが、頭が少し疲れているから直きやめにした。サン・マルセル街でビールを一杯呑み、その隣の雑貨店でスリツパを買つて宿へ帰る。ビールは一杯三十五フラン、スリツパは三百五十フランくらいだつたと思ふ。昨日と今日の経験でパリの物価の見当が大体ついた。

宿へ帰つてお湯の栓を捻つたら温いのが出る。有難い。バスを使う。そう言へば今朝顔を剃るとき湯が出ていたような気がする。昨日はどうしたのだらう。一日おきかな。今日はツーシュではなく温いお湯でいい気持だつた。それからこの宿は安いせいらうが、便所へ新聞紙を切つたのが置いてある。うちにいるときと同じでいい。全くアト・

ホームという感じだ。

夕食は昨日のアラゴーへ行く。この宿ではフランス語しか通用しないし、外へ出てもおぼむねそうだから、少ししゃべる稽古をしようと思いい、レストランで無駄口を叩いた。「僕はレストラン・アラゴーが好きだ。アラゴーはフランスの偉い科学者で、僕は日本の小さな学者なんだ」と言っただが、このウエートレスはアラゴーを知らないらしく、小さなレストランだとばかり、「プティ」を繰り返していた。パリはこういう打ち解けた気持ちにしてくれた。

夕食後シヨアジー街へ行ってみる。ゴブラン通りを行ってイタリア広場を過ぎ殆んど真直ぐ行けば直ぐだ。日本の知人の知人がそこに住んでいるというので手紙を持って来たからだ。訪ねる人はカンヌへ行っていて九月の何日とかでないと帰らないそうだ。手紙はコンシエルジュへ預けて帰る。

パリ日記(二)

『ももんが』一九九〇年六月号

一九五〇

八月二十六日土曜

七時半にちよつと目がさめたが、まだ眠いので寝た。今度目をあけたら九時だった。昨日のレストランまで行つて三日月パンを食う。今日は五つ持つて来たのをみんな食つてしまった。あとで笑つたかも知れぬ。そこでゆっくりしていると十一時になった。今日はセルジエスク教授を訪ねるつもりなのだ。

電話があるかどうか分らなかったもので、いきなり訪ねた。電話は持っていないそうだ。いろいろ話し学会の印刷物などを貰い、歴史学の国際会議のことを聞く。八月二十八日から九月三日までソルボンヌで開かれるのだ。この中に科学史の関係もある。これは日本を立つときは知らなかったのだが、出てもいいそうだから出ることにする。夫人の本は日本語に訳されていることはベルセネル教授から聞いたが、その本を見せてもらった。筆名をマリア・カステルスカといい、日本語に訳された本は「古代波蘭傳説」というのだ。その原題を手帳へ教授に書いてもらう。原文フランス語だ。

十二時になったから辞去する。一旦ホテルへ帰り、貰つた印刷物を部屋へ持つて行つてもらふ。歩きながら本屋があり次第カステルスカ夫人の本をきいたが何処にもなかった。そのうちにルクサンブル公園の前へ出た。写真で見覚えのある渾天儀を支えている噴水がある。もつとも水は出ていない。ここもまた美しい公園である。近代美術の展覧会は今はここではやっていないそうだ。パレーの裏側に本屋があつたのでまた覗く。その近くの古い建物の正面に「BERTE EGALITE FRATERNITE」と書いてあるのを見た。「自由・平等・同胞愛！」しかし、その自由と平等は多くの血を流して得られたものであることを思う。この美しい町に嘗てどれだけの血が流れたか知れない。それは決して過去ばかりではない。町の所々に花が捧げているのに既に気がついたので、近づいてみると石のタブレットに、ここは一九四四年某日二等兵誰それが祖国の平和のために斃れた所だと刻んである。そのときコンコルドの広場にバリケードが築かれたのである。そして同胞愛は戦死者の墓へ日毎に赤い花を捧げさせる。同胞愛は一層広くなって友愛である。パリはこの友愛を以てすべての人間を抱擁してくれる。私をしてレストラン・アラゴーで無駄口を叩かせるのもパリのこのフラテルニテだ。

空想をしながら街を歩いているとエッフェル塔がすぐそこへ見えたので、そっちへ行く。間もなく塔の前へ出た。三百フラン出して一番上まで登る。途中で二三度降りかえた。初めは登山電車のように斜めに登り、それから垂直に登る。着いたところがトロアジエーム・エタージユで、そこから四五メートル上が気象観測所になっている。その側面にタブレットがあるから読んでみると、一八九八年十一月五日デユクルテールによって此のプラットフォームとパンテオンの間(距離四キロメートル)で最初の無線連絡が行われたことを記念すると書いてある。

ここは高さ四〇〇メートルだから見晴しがいい。パリが一瞬のもとに見られる。すぐ目の下がシャン・ドウ・マルスの広場、ここは嘗てシャルルの作った最初の水素気球をあげたところだ。その向こうが陸軍兵学校。もう少し先を見るとアンヴァリッドやパンテオンのドームが見える。ノートルダム尖塔も見える。もっと向こうに東北に目立っているのはサクレ・クールであらう。西側へ廻ればすぐ下にセーヌ河が流れて居り、向側がトロカデロである。そのさきにはブローニーの森がひろがっている。街なかも木が多い。シャンゼリゼーの並樹が美しくチュイルリー公園へ続いている。

絵はがきを少し買って二三枚書く。シャンゼリゼーで一枚二十フランのがここでは二十五フランだ。富士山の上で草鞋が高いのと同じ理屈だろう。そのしるしにかエッフェル塔のついた切手みたいな記念スタンプが貼つてある。トイレットがあったから入つておく。番人がいるからこれはただでは済まないことは直ぐ分つた。五フランでいいかなと思つたが十フランやつたら「メルシー・ムッシュ」出口で何とかが三フラン、何とかが十フランと書いてあるのがちらと見えた。それがどういふ区別であるにしろ多い方を払つたのだから間違いはない。僕のは三フランのに該当したのかも知れない。パリにはこつという商売もある。

飛行機に乗っているとき下を見ても少しも危いといふ感じはしなかつたが、この塔の上から真下を見ると何だか少し目まいがしそうな気がするのはどういうわけだろう。だいぶ高いから風がひやひやする。今朝から少し曇っていたが、そのうちに驟雨が来た。しかし、馬の背を分けるほどの部分的のもので、下りてしまつたら殆んど止んでいた。塔の脚の西北の隅にエッフェルの像がある。河岸へ出てトロカデロの方を眺める。

それから今日はセーヌ河の南岸をゆつくり歩く。途中にゴージェ・ヴィヴァール書店があつたからショーウィンドーを見る。買つてもいい本がだいぶある。危険、危険。うっかり中へ入るとたいへんなことになる。見過してノートルダムを外から見ると。或る橋のところでは人相のよくない男が近づいて来て、「ハウ・ドウ・ユウ・ドウ」と英語で話し

かけて来た。何のことかと思っただらドルを持っているか、四五〇で買うと言っているらしい。さすがに種々の人間がいる。もう少し軟いのでは昨日凱旋門をぼかんとした顔をして見物していたら、妙な写真は要らないかと言っていた。「ノン、メルシー」と言ったら、あつはあつは笑っていた。この男の方が人相がよかった。

サン・マルセル街の昨日スリッパを買った雑貨店に石鹸があつたのを思ひ出し一つ買う。六十五フラン。ゴブランの辻で「フランス・ソワール」を買って宿へ帰る。今日はお湯が出ない。どうも一日おきらしい。しかし一日おきに入浴すれば今どき非常に贅沢だ。うちではせいぜい一週二回ぐらいしか立てないのだから。セルジェスク教授から貰って来た学倉の印刷物を読む。

八月二十七日 日曜

九時までねてしまった。すっかりパリ式になった。カーテンをあけてみるとよい天気だ。日曜ではあるし、今日はフォンテンブローへ行ってみよう。うちでパリの下調べをして来たからフォンテンブローはリヨン駅から行けばよいことを知ってゐる。その駅もすぐ分る、駅へ着いたら十時半だった。アムステダムではライデン行の切符を買うとき発音がわるいせいか分からないで苦労したが、フォンテンブローの往復切符というのが一声で通じた。売店でフォンテンブローの地図を買う。改札口を入ったところに何処行は何時何分で何番のホームと書いてあるらしいが、めんどうくさいから通りかかった年とつた駅員にきいたら、時間とその表を見て七番ホームと教えてくれた。行ってみると外を暗緑色に塗った列車がとまっていて、たいてい喫煙車と書いてありたまに禁煙車がある。喫煙車の方へ乗る。少し早いのが客はほんの少ししかない。煙草に火をつけ地図を見る。客が段々ふえたが掛けるところがなくなるほどではない。これで赤字になれば日本の鉄道よりマネージメントが余程うまいのだろう。三十分くらい待ったら発車した。パリのまちなかから煙をはいた汽車が出るのだから面白い。煤煙が入ってくる。日本の汽車を思い出してなつかしい気がした。十分するとすっかり田舎である。牧場もあるが、アムステルダム郊外のように牛が沢山はいない。ほんのちらほらである。畑もあって菜のようなのが作ってある。藁におに似たものがあるが、乾草だろう。乾草と思うと。マルケンの島へ行く途中でチーズを作る所を見物したとき、乾草うず高く積み上げた納屋の中を通り、乾草の匂がふんと来たのを思い出した。フランスの藁におは、大体日本と同じ感じだが、もっと幾何学的である。上が円錐でその下は真直ぐな円柱である。幾何学の発達した国はちがったものだ。

高圧線の所々に白と赤の玉がつけてあるのは注意のしるしだろうか。沿線にある家の屋根は褐色の瓦が普通である。壁は煉瓦のもあるが、白茶のしっくいが多い。だんだ

ん木が多く見えてくる。柳、シーダー、ポプラ、アカシアなどは分るが、あとは分らない。松の木もある。それはイタリアで見たのに似ていて日本の松とちよつと異っている。やがてボア・ル・ロアという駅があった。もうフォンテンブローの森である。次がフォンテンブロー・アヴォン。ここで下りる。下りる人が大勢ある。シャトーへ行く電車がある。小さなもので、日光や伊香保の電車と同じ程度である。シャトーまで三区で六十フラン。途中に別荘風の家がある。別荘もあるだろうし、常住の家もあるのだろう。すぐに宮殿へ入らずに其の前を通り過ぎてオペリスクのあるところまで行き、そこから左へ曲つて森を見る。美しい森だ。大きな木が茂つて居り、深い山へ行つた感じがする。

少し歩いてから更に左へ曲つて庭園の中へ入る。これも写真で見覚えのあるところを通る。さつき見て通つた宮殿の正面へ行き石の階段を登る。この階段の形式は古風である。行列に加わつて暫く待ち十五フランの入場券を買つて入る。三四十人たまるのを待つて入場させ、その一団に一人の案内人がつくのである。説明は初めフランソワ・ブルミエとかナポレオン・ブルミエとかいふばかりしか分らないような気がしたが、よく聞いていると少しは分るところもある。説明人は血色のよい若い男であつた。あのゴブランは誰とかの作でとかなんとか説明している手先をふと見ると左手の薬指が第二関節からなかつた。戦争でなくしたのではないかと思う。

この宮殿の正面がひどく古風だと思つたのも道理、説明を聞いているとこの宮殿の歴史は古いのだ。フランソワ一世のサロンだの、ナポレオンの部屋だの、マリー・アントワネットの部屋だの、豪華なものがいくつもある。マントルピースなどもイタリアの大理石を持って来て作つたとか、様々がある。それから次は「シャムブル・ア・クーシエ」へ参りましようというのが何回かあつて、しまいには見物人の顎を解いた。アントワネットの寢室だのいろいろの寢室がある。

一周り説明が終ると案内人が「ボン・ソワール！」と言つて帽子をとつた。まだやつと三時位だが、こういうものかしらと思う。がまぐちに小銭 といつても形はなかなか大きい、十フランのニッケルは昔の五十銭銀貨くらい、一フランはアミニウムで軽い形はそれに劣らず、二フラン、五フランのアルミ貨は少しづつ大きくなる。一をはたいてそつと掌の中へ入れてやつた。

そこを出てさつきの石の階段を下りるところに、滑るから注意しろと書いてある。それを見て一二歩踏み出したとき滑つたが、転ぶほどではなかつた。大理石質の石が毎日の見物人の靴で磨かれていてなるほどよく滑る。広い石だたみの前庭がある。ここをクール・デ・ザディユーという、ナポレオンが讓位のとき親衛隊に別れを告げた所の由。

宮殿の横の池の周りを歩いて花園の方へ出る。ジャルダン・ドウ・ディアーヌという庭園を見る。フォンテン・ドウ・ディアーヌという泉がある。少し雨が降って来たのでアーケードを見つけて待つ。すぐにやんだ。

宮殿の裏手の方に浅草のような盛り場があつてメリーゴーランドや何かははやしたてているのは思いがけなかった。その横に長いキャナルがある。電車の停留場へ出て暫く休む。電車で駅まで戻り、上りの時間を見ると小一時間あるので駅前のレストランで休む。往きにはリヨン駅からフォンテンブロー・アヴォンまでの間で三つ四つの駅しか止まらず、時間は一時間くらいだったが、帰りの汽車は小さいのもみんな止まった。何でも十二三の駅があつたと思う。汽車へ乗ってからまた驟雨があつた。右手に美しい虹が見えた。虹を「空の円弧」というフランス語はやはり幾何学的だと思う。

リヨン駅へ着いたら雨は降っていなかった。六時半頃宿へ帰る。暫く休んでアラゴーへ夕飯に行く。晩はアラゴーと決めた。今夜ゴブラン通りとサン・マルセル通りの辻に近いカフェーの前でダンスをしているのを見た。みんなきれいに踊っている。それを見物している人も大勢いた。今夜は月が殆どまん丸だ。雲が少し動いている。

八月二十八日 月曜

昨夜もなかなか寝つかれなかった。このあたりは割合静かとはいえ、自動車は夜おそくまで通っている。眠ろうと思つてもパリの町はまだ宵の口だという感じである。日記に書き落したことなどが次から次へと思ひ出されて、起き出して書くこうかと思つたが、明日は学会があるからそんなことはやめようと思う。しかし折角流れ出したのを忘れてしまつても困るので、忘れないように頭の中で作文をする。そんなことで中々眠れなかった。今朝一度目が開いて時計を見たら七時半だから、まだ少しいだらうと思つてまた眠つた。次に時計を見たら九時だったので飛び起きる。もっとも会は十時からでソルボンヌだから十分間に合うのだ。

このごろはゴブラン通りのオウ・ロワ・デュ・カフェといううちで朝食をとることにしている。それからソルボンヌへ行く。コンGRESの受付へ行き、私は会員ではないのですがS教授からこのコンGRESのことを聞いて来ました、傍聴させて貰えますかと聞き、こういうものですよと言つて日本科学史研究連絡委員会委員長の名刺を出した。会費を払いますかというので、払います、いくらですかと聞く。一千フランだという。払つた。すぐに会員券に名前と番号を書き入れてくれた。講和条約がどうのこのうのそんな事は一言もなかった。それからプログラムや何かをくれ、午後印刷物を取りに来てくれとのことであつた。受付にいますお嬢さんがもう開会式が始まっていますと案内してくれ

る。

そこで大講堂へ入った。このコンGRESは大きな会でソルボンヌのグラン・アンフィテートルがいつぱいであった。ドクトル何とかの開会の辞は残念ながらよく分らなかった。クルチユールという言葉が何回も出て来たので、香り高いフランスの文化の匂をいくらか嗅いだような気がした。大講堂の天井には美しい絵が描いてあった。

終つて講堂の外へ出ると広い廊下の向側に腰のかけられる段がついている。そこへゆつくり腰をかけてプログラムを読む。しばしソルボンヌの学生になつたような気がして楽しかった。この国では至極簡単にこの国際会議のメンバーにしてくれた。実は傍聴だけさせて貰えばよいと思つたのだが、会員券を呉れて、あなたはもう会員ですという。そうしてどの部会へ出てよいのだという。すばらしい自由と平等と友愛ではなからうか。聞きたいと思う講演は非常に沢山ある。ゆつくりプランを立てることにしよう。

ソルボンヌの本屋で少し買物をして一旦宿へかえる。ここから十五分くらいである。午後は二時からである。十二時から二時までには役所でも何でもみな閉めてしまう。博物館でもそうである。ルーブルは表は閉じないが、部分的にしめる。銀行は一時半から開くところもある。商店もたいてい閉める。カフェーやレストランはむろん別である。

宿の近くの銀行で旅行手形をフランに換えて貰いソルボンヌへ行く。厚い印刷物を貰う。

帰りはサン・ミシエル通りへ出るルクサンブル公園の脇を通る。ゆつくり歩いて例の噴水の横まで来るとうしろから来た僧服の青年がメトロは何処かときいた。あそこらだろつと指さしながら答える。ポール・ロワイヤール街へ出る角あたりにあつたと思つたからである。勉強に来ているのかと聞くから、コンフェレンスに来たのだと答える。歴史学の会か、僕もそつだ、カトリックの会だと言つていた。アメリカから来た由。僕を留学生かときいた。そんなに若く見えたのかと思う。もっともこの年で留学生でもないなどと思うわけでは更々ないが、一瞬そつという感じが雲のように通り過ぎたのである。パリが、そうしてソルボンヌが僕を若々しくしてくれたのかも知れぬ。現に今朝ソルボンヌ大学の廊下で留学生になつたような悦びをさえ感じたのであつた。

その青年とメトロの入口のところで別れ、ポール・ロワイヤール街を歩いて帰る。パスカルがいたポール・ロワイヤールの僧院はこのあたりにあつたのだらうか。キュリー夫人がワルシャワから出て来て初めて下宿したのはポール・ロワイヤール街からベルテ

ロー街へ曲る角の小さい裏通りのフレテル街であった。島崎藤村が下宿していたのもこの辺だ。

今日はアラゴーがしまっている。定休日だろうか。サン・マルセル街のもう少しレストランらしいのへ入る。ここはちゃんとギヤルソンがいて、テンプル・クロスも少々きれいだ。アラゴーなどはテンプル掛けの上へ紙をしいて、それを取りかえる式だ。等級をつけたらきつとD級くらいだらう。今夜行ったのはC級くらいか。B級の下くらいかも知れぬ。メニューではアラゴーと同じようなものを食ったが二倍くらい取られた。アラゴーだけがパリのレストランだと思わないためにこれもいくらか参考になるだらう。

今日はまた湯が出ない。一日おきのことが確かになった。今朝は湯が出たが、朝は沸かすとみえる。 kongress のレポートにアメリカのゲルラックという人が科学史について大いに述べている、この会議は非常に用意がよくて、大きい報告は印刷ができていたのだ。これはとても便利だ。それからさつき買った本を少し見る。

八月二十九日 火曜

予定れてゐなかつた會議があつたり、また東京へうまく接續する飛行機の便は一週一回しかないさうだから、パリ滞在の延期をして貰はなければならなくなつた。エール・フランスで呉れた地図の裏に滞在の延期をしたいときはソーセー街十一番地のミニステル・ドウ・ランテリユールへ行けと書いてある。アムステルダムで査證を貰ふとき、あの親切な婦人館員の好意に甘んじて、実は申請書へ書いたのよりもう少し長くして載きたいのですがといふと、それは此処ではできないからパリの外務省へ行つて説明しなさいと言つたやうに聞いたのだが、この案内書には内務省と書いてある。とにかく其処を訪ねて行つてみる。メトロでオペラまで行き、地図を見ながら行くと直ぐ分つた。黙つて入つて咎められでもすると詰らないから、守衛に滞在の延期をしたいのですが何処へ行くのですかと訊ねた。そのたどたどしい會話をしてゐるのを中から出て来た赤い上衣を着たお嬢さんが聞きつけて、それはミニステル・ドウ・ランテリユールだけれども、ここではなくてフリードランド街だといふ。持つてゐた地図を差し出してよく教はらうとしたら、いきなり僕の胸から萬年筆を抜きとり、キヤップを外してこれを持つてゐるとばかり僕の方へ突き出すから、恭しく受け取つて持つてゐると地図の余白へ、「二八、アヴェニュー・フリードランド」と書き、更に「一二二、スタシオン・バルザック」と書いて「一二二」というバスに乗り、バルザックといふ停留場で下りるのだと教へてくれた。そのときはもう十二時に近かつたのだが、今行つても駄目だから二時過ぎにいらつやいと附け加へ、それから分つたかと念を押す。これもまた何といふ行き届いた親切であらう。

今日の晝休時間はプティ・パレーの展覧會を見ようと思つて、ガブリエル街まで来るとその横丁のリユー・ドウ・レリゼーのメーゾン・ドウ・ラ・パンセー・フランセーズというところにマチスの個人展覧會があるといふので入つてみる。古いのもあるが今年のもあつた。数は少い。目録を買はうかと思つて立つて見てみると、賣場の中々品のあるお婆さんが「ス・ソン・デコレー・パール・アンリ・マチス」と一語一語区切つて説明してゐた。それは自分へではなく賣場のすぐ前に立つてゐた三人連れの婦人客を異邦人と見て、さう説明したのである。それから気がついたやうに「あなたはフランス語をお話しになりますか。」ときいて、あとは普通の調子で何やらしゃべつてゐた。そのおかげで目録の表紙がマチス自身の装禎であることが知れた。二百五十フランだつ

たかで余り安くない。入場料も百フランだった。

それからプティ・パレーへ入る。これは市立で百フランとる。ルーヴルは國立で三五フランだ。ここにはフランスの古い繪が多いが、近代のもかなりある。カンタン・ドウ・ラ・トゥールのダランベールの肖像があった。本に出てゐる顔だ。繪はがきがあったら欲しいと思つたが、かういふのは出来てゐない。「ラ・ヴィエルジュ」・

ダン・ラール・フランサー」という本になつてゐるのを買つたが、むろんそれにも載つてゐない。それはフランスの極く古い繪画や彫刻の図録である。この中に十三世紀ころの繪画や彫刻がだいぶ出てゐるが、このやうに一箇所へ集めてみると人物の顔に或るタイプが感じられるやうである。おそらくフランスの顔なのであらう。

午後フリードランド街二八番地へ行く。やはりミニステル・ドウ・ランテリユールで、なるほどこちらが旅券係である。エール・フランスの案内は間違つてゐる。受付へ滞在延長のことをいふと向つて暫く待てといひ、だいぶ待たされた。やがて呼び出されて案内された室へ入ると、ここは男の役人だ。この人は少々こはい感じがした。「汝は何を欲するのか」という風に聞えた。滞在を十日ばかり延長して欲しいという、それはプレフェクチュール・ドウ・ポリスへ行けといふ。何処かときいたらシテだといふ。そのサンキエーム・ピビューローと紙片へ書いてくれた。恐い感じがしたのは縁の太い眼鏡をかけてゐたことや、男性的な言ひ方のほかに、こつちが言葉が下手でびくびくしてゐたからのことであらう。行くべき役所の中の課まで書いてくれたのだから親切なわけだ。この案内書きによつて来たのだが、これが間違つてゐるのでせうかと言つたら、それには答へず短い延長はプレフェクチュールでやるのだと言つたらしがつた。

そこはエトアールから出る放射状街路の一つで凱旋門から遠くない。シャンゼリゼーへ出る。もう街路樹の紅葉しかけてゐるのがある。パラパラと散つてゐる木の葉もある。パリはもうすつかり秋だ。今朝はだいぶ涼しかった。明日はシテのプレフェクチュール・ドウ・ポリスへ行かなければならない。

宿のマダムが「どうだ満足か」ときくから「ウイ、トレ、コンタン」と答へてやつた。「トレ・ビヤン」と言つてにこにこしてゐた。ほんとに自分に恰好のホテルだ。お釣にあちこちで賣ふアルミ貨は始末がわるい。それをぶちまけて、僕はこれは嫌いだから好かつたら使つてくれと言つたら、一寸待てと言つて二十フラン札を持つて

来て換へて呉れるといふ。自分の出したのを念のため数へてみたら十九フランで一フラン足りなかつた。しかし折角換へてくれるといふのだから「メルシー」と言つて札を貰

った。「コンタン」はそれに続いての話だった。これはもう黙つていてもアラゴーで注いでくれる一杯の葡萄酒の軽い酔ひがまだいくらか残つてゐた仕業である。といふよりもパリが私の心に自由を許すのだ。

八月三十日 水曜

シテのプレフェクチュール・ドウ・ポリスへ行く。警視廳みたいな役所なんだらう。昨日教はつた第五課といふのをきいたらFの階段を上げといふ。上つて行くと、何番とかの室へ行けといふ。行つてみると、「延長係」という室だ。なるほど！ だいぶ大勢人が待つてゐる。男と女の係員がある。暫く待つて自分の番が来たらしいので婦人係員の方へ行つて話した。待つてゐるうちに見るともなく見るのに、みんなが旅券のほかにか紙きれを持つてゐる。これは何か要るのだなと思ふ。果して居住證明が要るのだといふ。自分のは延長の方は訳を話したら直ぐ承知してくれた。その證明はホテルで書いて貰つてその地区の警察のスタンプを貰つてくるのだと教へてくれた。昨日の役所ではそこまでは教へてくれなかつた。さうして午後二時過ぎかまた都合で明日いらつしやいといふ。

宿へ歸つて話すと、ぢやマダムに書いて貰つてあげるといふ。何だ、今までマダムと思ひマダム、マダムと呼びかけてゐたその人はマダムではなかつたのか。飛んだ失礼をしたと思ふ。出て来たマダムはずぶんお姿さんだつた。今までマダムと思つてゐた人はどうも使用人のやうには見えない。おそらく娘だらう。顔が似てゐるか

どうかはそこまで判断ができない。時々鍵を出してくれるお爺さんはこの娘のお父さんで、ここの御亭主ではないか知ら。どうもうちのものとほんの一人二人の使用人だけでやつてゐるらしい感じなのである。

そのマダムが證明書はすぐ書いてくれた。この異邦人の変な綴りを書き悩んでゐる様子なので、傍からそれはイ・グレックとか何とか言つてやつた。コンミサリアは何処かときいたらヴォークランの一番地だといふ。地図を出して指して貰うと直ぐそこだ。さうして、すぐやつてくれますよ、「トウー・ドウ・スイット」といふ。行つてみるとすぐ判を押してくれた。

午後プレフェクチュールへ行つて丁度二時に入つて行くと、さっきの人が席についたところでもまだ誰も来てゐなかつた。證明書を出すと「それよ」とばかり「セッサ！」と言つた。何日位延長したいかといふから十日ほどといふと「ぢや十五日にしておきませう」といふ。有難うございましたと言つて立つと、につこりとして會釋した。ちよつどアムステルダムのフランス領事館ひ婦人館員と同じ様子であつた。何だか顔つきまで似

てゐるやうな気がした。二人とも実に懇切な人たちである。

だいぶ駆け廻つて疲れたが、これで大事なことが一つすんだ。二度目にプレフェクチュールへ行く前に時間があつたのでルーヴルへ行つた。今日は中へは入らず繪はがきと印刷物を少し買った。これから少し散歩をしよう。ボン・ヌフからリヴォリ街へ出る。サン・ジャックの塔の傍を通り、オテル・ドウ・ヴィルの脇を通る。その道はやがてサン・タントワーヌ通りとなり、バスチーユの塔が向うに見える。途中に本屋があつたので覗くと、昨日ソルボンヌで気がついたフランクの「アインシュタイン　その生活と彼の時代」のフランス訳があつた。これは現在の人のことを書くには少し妙な題だが、フランクのだから買つておくことにした。もう一軒の小さい本屋にはたいしたものはなかつたので繪はがきを四五枚買ふ。

バスチーユの廣場で「七月の塔」を見ながら休む。さつき買った繪はがきの中へバスチーユの広場を入れたつもりで、出してみたらヴァンドームの廣場のやつた。スパイラルに浮彫のある塔のあるところだ。アムステルダムのレストラン領事館に航空會社のポスターがあつて大きな写真が出てゐたのがこれだつた。ヴァンドームの廣場へはあらためて行つてみなければならぬ。

廣場のカフェーで繪はがきに書きながら休んでゐると浮浪人が足もとまで吸殻を拾ひに来た。煙草を二三本出してやり、自分のへつけるついでに火もつけてやると、しきりに何か言つてゐるがよく分らない。何処の國の人かときいたらしがつた。かういふ人と話などしてカフェーで嫌がるとわるいと思ひ、黙つてゐたら向うへ立ち去つた。吸殻を拾つてゐる人はパリでかなり見た。今は本職の浮浪人のやうだつたが、もつと普通の様子の人が拾つてゐる。着いた日の晩にサン・マルセル街ですでにそれを見た。

カフェーのすぐ前にメトロの入口がある。そこを入ると地下道にギターが何か弾いてゐる盲の女がゐたので二十フランの札をそつと箱に入れてやつた。煙草もこれも滞在延期がうまく運んで心が弾んでゐたためであらう。

メトロでプラス・ドウ・ラ・ナシオンへ出る。廣場の東に女神の像が二つ立つてゐる。そのあたりを暫く歩いてから、メトロでプラス・ドウ・ラ・レビュブリックへ行く。今日はプラス廻りになつた。ここには右手に月桂樹が何か持つた女神の像がある。台石には例の「自由・平等・同胞愛」が彫つてある。その小公園のベンチで休む。暫くすると向うの方で人相のよくない婆さんが何か押賣りしてゐるのかと思つた。やがて僕のところへも来て、小さな切符のやうなものを突き出し「ラ・シエーズ」という。それでベン

チの使用料を寄越せというんだと分つた。切符には6と書いてあつた。十フラン出したらお釣をさがすやうな様子だからいいと言つた。

今日は日中はいくらか暑いくらゐだつた。しかし朝晩はかなり涼しい。アラゴー通りの並木はだいぶ紅葉してゐる。だんだんユトリロの色調になつて来る。昨夜湯が出たから今日は休みかと思つたら、湯が出るのでバスを使ふ。もう水浴はとてもできない。

八月三十一日 木曜

ゴブランからジョルジュ五世までメトロに乗り、シャンゼリゼーの航空會社へ行く。水曜日にローマ発マニラ行が出るといふ。すぐ電話をかけて十三日の水曜のは席があるといふ。ローマで一日泊るかといふから、ヴィザが面倒ぢやないかと言つたら、席の豫約をした切符を見せればわけないといふ。それで十二日にパリを立つこと

にした。ローマで一日半あるといつて時間を書いてくれた。しかしパリ・ローマの席は明日の午後五時にならないと分らないからそのとき来てくれとのことである。切符を預けて其処を出る。

小雨が降り出したのでロンポアン・デ・シャンゼリゼーの木の下で暫く休む。雨宿りしてゐる人が他にもゐる。少しくらゐの雨は平気で歩いてゐる人が多い。止みさうもないし、たいした雨でもないから出かける。フランクリン・D・ルーズヴェルト街のグラッパレーへ入つてパレー・ドウ・ラ・デクーヴェルトという科学博物館を見ようと思ふ。ところがまだ昼休時間である。そこでチュイルリー公園の方へ歩いて行き、ヴァンドームの廣場の塔を見ようと思つた。その途中で古版本を賣つてゐる店を見つけた。シヨウウィンドウを見るとモンゴルフィエの風船の報告書がある。千七百何年かのだ。「トレ・ラルル」と書いてあるから相当高價なのであらう。この店も昼休みで閉つてゐるのが幸ひだ。かういふものは外から見ただけに限る。こんなのが五十フランくらゐでセーヌ河畔の古本屋にないものかなあと思ふ。

そこから少し行くとヴァンドームの廣場である。螺旋状に戦争の物語が彫りつけてある。つまり繪巻物を柱に巻きつけたやうなもので、ローマのトラヤヌスの柱の真似であらう。台石に一八〇五年と彫つてある。さつきの本屋をもう一度覗いてチュイルリー公園へ入る。雨がだいぶ降つて来たので木の下で雨宿りをする。少しばかり水溜りができて、雀が水を浴びてゐる。若い男女が向うの木の下で戯れてゐる。木の葉を集める車を引いてゐる公園の人たちも雨宿りをしてゐる。中々やみさうもないからメトロで宿へ帰らうと思ひ、雨の中をコンコードの停留所まで歩く。その石の壁に五六枚並べられて兵士の墓標があり、赤い花が供へてある。

1の電車へ乗つたのだから、パレー・ロワイヤールで乗り換えればゴブランへ出られるのだが、気まぐれにそのまま乗つてポルト・ドウ・ヴァンセンヌまで行く。ヴァンセンヌの森もプログラムの中へ入つてゐたからだ。外へ出てみるといい塩梅に雨はやんでゐる。しかしヴァンセンヌの公園はまだこの近くではないらしい。このあ

たりはだいぶ場末の感じた。少し歩き廻つてプラス・ドウ・ラ・ナシオンまで戻る。例の女神が二人道の両側に立つてゐるところだ。この廣場は割に静かなところだ。メトロへ入るとエトワール行という電車がとまつてゐる。ここが始発である。それに乗る。ルーヴルの方を通るのかと思つたら、南の方をつまりプラス・デイタリーの方をぐるつと廻るやつだ。この線は時々地上へ出る。たうとうトロカデロまで乗り、そこで下りた。この間はずゑぶんある。さつきは雨がやんでゐたが、トロカデロで外へ出たらまた降つてゐる。博物館のポーチで雨を除けながらあたりを見廻し、向側のカフェーへ入り茶を飲む。今日はもう博物館を見るのはやめにしてゆつくり休む。うしろにゐた若い男女はドイツ語を話している。ここのギャルソンはドイツ語を知つてゐた。その連中が立つとき「ダンク・シェーン」と言つてゐた。それから間もなく僕も立つたが、さつきの情性でか僕にもさう言つた。

さつき覚えたメトロでプラス・デイタリへ帰る。ここで乗り換へると次がゴブランでたつた一丁場だから下りてゴブラン通りを歩く。途中にゴブラン織の工場がある。木曜の午後二時から四時まで無料で見せると書いてある。ちよつと今日だ。しかし通りに面した大きな窓が開いてゐて中がだいぶ見える。それで織る機巧の極く大体は分る。

ヨーロッパの雨はどしや降りはないものかと思つてゐたら夕方六時過ぎからかなり強く降り出した。アムステルダムに十日ゐる間に雨は何日か降つたが、たいてい小降りであつたレインコートだけで傘なしで済ませて来た。今日は傘なしでは歩けない。エッフェルへ行つた日に空模様が変わるので買った傘をさして夕飯を食ひにアラゴーへ行く。「ソワール」を見てゐるとトランス・ワールド・エアラインの飛行機が昨夜カイロの近くで遭難して生存者なしださうだ。

一九五〇

九月一日 金曜

日本の震災の日。少し雲があるが雨は降つてゐない。ゴブランの辻のオー・ロア・デユ・カフェーで朝食をとる。朝はここに定めてしまった。初めカフェーはグランかといふからウイと答へ、オー・レーかといふからさうだと言つたら、もう黙つて掛けてもグラン・カフェーオー・レーを持つて来る。つまり牛乳入りコーヒーの大きいコップだ。これを呑みながら三日月パンを食ふのは中々うまい。あのパンはバタが沢山入つていて見えてふかふかで、何もつけないでコーヒーを呑みながら食ふやうにできてゐる。朝はたいていこれだけらしい。もつとも朝でも葡萄酒を呑む人はゐるやうだ。あれは我々のお茶と同じだらうから。書や夜のパンは例の棒のパンを切つたのである。これは単純なパンで外側は少し固いが、それをポリポリ食ふのが中々うまい。アラゴーではそれを十二、三センチの長さに切り、中程に庖丁を入れたのを出すが、四五センチの厚さに切つたのを四つか五つガラス鉢に入れて持つて来るうちもある。太さは日本の切らない麸くらゐである。まるごとの長さは五六十センチのからメートルに近いかと思はれるものもある。これをよく人がむき出しのまま脇にかかへたり、買物袋へ突込んだりして歩いてゐる。レストランで使うのはたいていメートルもある長いので、それを細長い柳の籠に入れて運んでゐる。

朝食ふので例のクロアッサンといふ三日月パンでなく「パン」といふのもある。それはちよつとカステラ式のパン菓子やうのものだ。婦人客などがよく食つてゐるのを見た。一度試みたことがあるが、朝はクロアッサンの方が僕は好きだ。これは朝に限つたわけではなく、おやつにも食つてゐるやうだつた。葡萄酒を呑みながらこれを食ふのがおやつに適してゐる。そのときはヴァン・ルージュつまり赤葡萄酒の方が似合ふやうな感じがする。

何かの話のつづきからセルジエスク教授が日本でもパンを食ふかといふので、大いに食ふ、さうしてフランス語と同じく「パン」と呼んでゐると答へたら「ホー」と言つて嬉しさうな顔をした。そのあとでラテン語では「パニス」ですと教へられた。そこまでは知らなかつた。

このごろはずつと朝の三日月パンは三つにきめた。初めは朝が遅いのと、わざわざ町へ出かけて行くせゐか、腹がへつて四つか五つ食つた。日本では朝食も比較的多くとる

癖がついてゐるためであらう。しかしクロアツサンを五つも食ふフランス人はゐないらしい。きまりがわるいばかりでなく、段々慣れて来たら三つ食つてちよつとよくなつた。

コーヒーの大的方は普通のコーヒー茶碗の三杯分くらゐはある。肉の厚い重い茶碗である。三日月パンは二十フランであることがそのうちに分つた。コーヒーは僕が行く家では二十五フランであつた。ゆっくり朝食をとつてソルボン又へ行く。歴史学の国際会議のプログラムにメリディアンといふ本屋で歴史書の展覧即責合をやるといふ廣告が入つてゐたので行つてみる。目録ができてゐるといふから見せてもらふ。科学史の本もだいたいありさうだ。目録に出てゐて品物のないのもあつたが、一つ二つ小さいものを買ふ。

サン・ジェルマン通りから河岸へ出る。今日はアヴェニュー・ドウ・ニュー・ヨークの近代美術館を見ようと思ふ。バレー・ドウ・トーキョーと言ひ、割に新しい建物だ。以前ルクサンブルにあつたのが近頃はここにあるさうだ。先づその近くのレストランへ入る。まだ余り腹もへつてゐないが、二時の開場に少し間があるからコーヒーでも吞まうと思つたのであるが、「めしか」ときくから「ウイ」と答へる。そしたらコップを持って来たから「ヴァン・フラン」といふことになるのである。ピテキかなにか食つた。食つてみれば別に多すぎるといふことはない。コーヒーしておかうと思つたのは主として経済的見地からである。腹の虫も満足したにちがひない。

アラゴーだと葡萄酒はコップに一杯だけ注いでくれるのだが、今日はドウミかといつから「ウイ」と答へた。ドウミ・プーティユはコップに二杯ある。ひるは殆ど呑んだことはないから少し酔つた。ちよつと時間になつたので美術館に入る。河岸に面したのがアヴェニュー・ドウ・ニュー・ヨーク、裏がアヴェニュー・ウイソンで、バレー・ドウ・トーキョーはその間に挟まれてゐる。展覧会はベルマナンが三十フランでエクスポジション・タンボレルが五十フランと書いてある。八十フラン出して両方と言つたら、エクスポジションを買へばベルマナンは当然見られるのだと言つて三十フラン返してくれた。臨時展の方は何とかいふ人の個人展で余り面白くなかつた。常時展の方はすばらしいものが沢山ある。マチスの室、ドンゲンの室、ヴラマンクの室、といふ風になつてゐる。彫刻の室もある。

四時少し過ぎそこを出る。今日は五時に航空会社へ行く約束なのだが、まだ少し早い。アヴェニュー・モンテーニュを歩いてロンポアン・デ・シャンゼリゼーへ出てベンチで暫く休む。自動車がひっきりなしに通る。どういふ用事の人が自動車を走らせてゐるのかと思ふ。ヨーロッパではもう見物客がだいたい歩いてゐるから、さういふ人たちもかなり含まれてゐるだらう。合社の仕事で飛び廻つてゐる人もあるだらう。くだらない想像をしてゐるうちに時間になつたのでフィリップ・エア・ラインへ行き切符を受取る。十二日パリからローマまでの席を予約する。八時十五分までにアンヴァリッドのエア・ステーションへ来てくれとのことだ。こいつは少々早い、その代りローマ着は早い。

飛行機は十時に出るさうだ。イタリア領事館をきく。エール・フランスで買った案内に書いてあるのと少し異つてゐる。それにはリユー・ヴァレン五〇番地とあるが、リユー・ドウ・ヴィラルルの二だといふ。それからフィリップの査證はアメリカ大使館でやるさうだ。メトロでゴブランへ歸る。

今夜は九時から歴史學會議の會員券でルーヴルを見せるさうだ。もつともこれはこの會員に特別に見せるのではなくて、金曜の夜は一般に開くのだ。ともかく行つてみる。イルミネーションでもするのかと思つた。案内書をよく見たらギャラリーをイルミネートするといふので、外をイルミネートするのではなかつた。これは書間暇のない人が見るものだ。特に夜見るべきものではない。夜見た方がよいといふ繪は余りあるまい。彫刻などは人工照明で見ると面白いかも知れぬ。しかし入口がひどくこつた返してゐるから引返した。宿でバスでも使つた方がよつぽよい。

ホテルへ十二日に立つ豫定だといふ。着いたとき一週間が十日だが都合で延びると言つてある。だいが延びるせいか一例の小マダムが　マドマゼルぢやなさうだ、亭主の顔は見かけないが　パリはどうかときいた。パリは好きだ、さうしてホテル・スイも好きだと言つてやつた。その拍子に宿賃を払ふのを忘れてしまつた。もう催促などはしない。豫定がついたから明日かためてみんな払はう。

九月二日　土曜

今日は少し雲がある。ゴブラン通りのいつものカフェで朝飯を食つてあたら目の前ではつと火を吹いた。何かと思つたらオートバイと自動車と衝突したのだ。自動車が方向変換をするため斜めに横断しようとしたのである。オートバイの男は倒れたままちつとしてゐる。すぐ人が向側の街路樹の根元へ連れて行つた。お巡りさんがかけて来た。五分くらゐすると擔架と看護婦が来た。日本では何分くらゐかかるだらう。看護婦がなにやら手当をしている様子である。通りの人が寄つてたかつて見てゐる。膝を怪我したと話してゐるらしい。やがて擔架でその男を運んで行つた。お巡りさんが大勢来て現場をしらべてゐる。自動車の男は怪我も何もせず、巡査に調べられてゐる。交通が激しいからかついふことも時々あるのだらう。コーヒーを呑み終るころは人も散じてゐた。

アンヴァリッドの前のリユー・ドウ・ヴィラルルへ行つたら旅券の査護はリユー・ヴァレンの大使館へ移つたと書いてある。エール・フランスの案内の方が正しかつたのだ。PALのお嬢さん古いのを教へてくれたな。僕がリユー・ヴァレンぢやないかときいたら、いやリユー・ドウ・ヴィラルルの二だといつて紙に書いてくれたのだ。ヴァレンはぢき近くである。そこへいく途中でロダン美術館を見つけた。これは何れ改めて来るこ

とにしよう。

イタリア大使館はすぐ分つた。四五人待つて査證を貰ふ。ヴィザの料金一八一六フランと窓口にあるから、それだけ用意して待つてゐたら二三一六フランだといふ。五〇〇フラン高いのはどういふ訳だらう。来るときローマで払つた三千リラより割高である。あれは数時間ローマにとまつただけだが、今度は一泊するからかな。別にわけはきいてみなかつた。

それから急いでガブリエル通りのアメリカ大使館へ行く。門がしまつてゐるので横の方からでも入るのかと思つて見過したら、向うの玄関に立つてゐる守衛が、閉めたといふ手眞似をしたから、こつちでもさうかといふ合図をして時計を見たらもう十二時十分前だつた。今日は土曜日だから月曜に来ることにしよう。

チユイルリー公園へ入る。イタリア大使館へ行く頃小雨が降つて来たが、そのうちにやんだ。初めてルーヴルへ来た日に茶を呑んだ公園の店で休む。今日はこれからモンソーといふ公園を見よう。ここから歩いてもたいしたことはない。マドレーヌ寺院の美しいコロネードを見てプールヴァル・マルシエルプを行くとやがてサン・トゥギュスタン廣場へ出る。そこにサン・トゥギュスタン教会が立つてゐる。なほ真直ぐ行つて左へ曲つたところがモンソー公園である。落ち着いた静かな感じの公園である。入つてみるとあちこちのベンチに本を讀んだり、ぢつと目を瞑つたりしてゐる人がある。案内記の写真で見覚えのあるローマの廢墟でも思はせるやうな石柱が立つてゐる。池はすつかり干あがつてゐた。木かげのベンチに腰をかけて休み煙草を吸ふ。

パリへ着いて間もなく煙草屋へ入り、ほかの人が買つてゐる水色の包みのを買つたら実にまづかつた。あとで包を見たらゴローアズといふので、サブタイトルにコポラル・オルディネールと書いてある。なるほど安煙草と断つてある。二十本入り六十五フランだつた。これを吸つてゐる人が多いやうだ。その後もう少しいいはないかと思つて見廻してゐたら、バルトーといふのを出してくれた。これは百二十フランでちよつとよかつた。セニヨリータといふ巻煙草くらゐの小さい葉巻は十本入りでやはり百二十フランだ。上等煙草と看板を出してゐる店も所々にあるが、それでも品数も量も少い。フランスはマッチが前から高いのださうだが、日本の廣告マッチの大きさが五フランだ。

この公園に里芋の葉そつくりの植物が芝生の真中に一株あつた。あれは里芋だらうと思ふ。その近くにモーパッサンの石膏像がある。暫く休んでからフランクリン・ド・ルーズヴェルト街へ行き、パレー・ドウ・ラ・デクーヴェルトへ入る。パレーといふのはゲ

ラン・パレーの一部にあるからだらう。発見の博物館といふほどの名であ

るが科学博物館である。物理の部にはアムペールの実験装置などがある。かういふ歴史的なものもあるけれども、陳列は飽くまで科学博物館の方式であり、特に歴史に重きを置いてゐるといふのではない。この点ライデンの科学史博物館やハーレムのテラー博物館とは別である。ここでは例えば物理の中を力学、光学、電磁気学などと細かく分け、この中の主なる項目について解説がしてある。さうしてそれぞれの主題についてこの国の学者が重要な貢献をしてゐる場合は肖像を掲げ歴史的な解説がしてあるといふ具合である。さうしてスイッチを入れると動くやうになつてゐるものもある。光の屈折などでも水槽へ光束を送つてその曲るのを見られるやうになつてゐる。

数学の部も専門別にした上で、その應用まで示してある。種々の曲面の模型や、結晶学への数学の應用とかいふものが示してある。天文の部は写真や覗きめがねが多いのは当然のことであらう。丸天井に恒星を配して望遠鏡で覗かせるのなどもあつた。そのほか化学や生物学関係もみんなある。フランスぐらゐ立派な学者が大勢出てゐれば、各分野において自國の学者の業績を並べるのも張合ひがあり、且つ見榮えがする。

賣店があつて本や印刷物を賣つてゐるから行つてみる。まへに日佛會館でフランス書の展覽會で見たダルソンヴァールの伝記がある。ブランリーのことを書いたのがある。ブランリーは無線の研究者だ。「わが父ブランリー」といふ題だから息子が書いたものだらう。セルジェスク教授が此処で講演したパンフレットもある。この賣場の婆さんは本を手にとつて見るとこつちの手許をちらと見るので嫌な婆さんだと思つていたら、たうたう自分の前へやつて来て、此処は讀書室ではありませんと言つた。左様！ 知つてゐる。こちらには懐都合ということもあり、どれとどれを買はつか考えてゐるのだ。本をよく見ずにつかつか買へるものか。この婆さん無学だと思ふ。尤もフランスの本は中が見られないやうになつてゐるから、雑誌や何かで紹介を讀んで判断し、買ふときは誰の何といつてあつさり買ふのが定石なんだらう。即座にダルソンヴァールを示して、これは見本だと思ふがきれいなを出してくれと言つた。だいぶ汚れてゐるのだ。そしてたらこれしかないと言ふ。次にセルジェスク教授のパンフレットはピンでぶつぶつとめた跡があるので、これはあるだらうと言つたら出してくれた。ブランリーは町の本屋にもあるだらう。つらあてに沢山買ふ必要もないから二つだけ買つてさつさと出る。婆さんメルシーとも何とも言はなかつた。

外へ出てシャンゼリゼーの並樹の下のベンチでパンフレットを讀むときにはそんな小競合のことは忘れようとしてゐた。あの賣店は賣れさうもないから退屈するだらうと同情の念が湧いた。パンフレットにセルジェスク教授の紹介が書いてある。著書もあげて

ある。これは有難い。実はこれまでに教授のことを余りよく知らなかったのだ。ダルソンヴァールの本のページを切つて少しばらばらとやつてみる。

アンヴァリッドのエア・ステーションを見届けておく必要があるので、さつきイタリ
ア領事館からアメリカ大使館へ行く途中で見ておいた。出発は河岸に面した方である。
このあひだ飛行場から着いた日にタクシーへ乗った所は南側の寺院に面した方であった。
出発の方の階段を下りたところが汽車の驛でヴェルサイユへ二十四分と書いてある。明
日天気がよかつたらヴェルサイユへ行つてみようと思ふ。

シャンゼリゼーを歩いてゐたらブロード・ウエーといふ映画館があつて、ルネ・クレ
ールの「ラ・ボート・デュ・ディアブル」といふのがかかつてゐる。ミシエル・モルガ
ンが出てゐるさうだ。英語のタイトルつきと書いてある。今週が最後とあるから見よう
かと思つたが少し疲れたからやめた。美しいアレクサンドル三世橋を渡つて宿へ歸る。

.....